

在宅高齢者・認知症当事者を対象とした困り事・対処法共有サービスの研究開発

なかむらまさひで

中村匡秀^{1,3)}、雲丹亀和希¹⁾、佐伯幸郎¹⁾、安田清²⁾

1) 神戸大学 大学院システム情報学研究科、2) 大阪工業大学 情報科学部、3) 理化学研究所 革新知能統合研究センター

【目的】

施設介護から在宅介護へのシフトが進む中、在宅生活で生じる様々な困り事を、高齢者や認知症当事者が自助・互助で対処することは容易ではない。我々のグループでは、在宅高齢者を対象とした困り事・対処法共有サービス Compass4SL (Community-based Problem and Solution Sharing Service for Senior Living) の研究開発を進めている。Compass4SL は、在宅生活における様々な困り事とそれらに対する対処法を、コミュニティの集合知として Web 上で共有するプラットフォーム・サービスである。本研究では、Compass4SL の機能の概要を紹介し、実証実験の計画について述べる。

【方法】

Compass4SL は、「困っている人」と「支援する人」の間に立ち、在宅生活における困り事とその対処法を共有する場を提供すべく、以下の3つの機能を提供する。(機能 F1) 対処法を共有する：困っている人が対処法を検索するとともに、支援する人が自分の知っている対処法をシステムに登録する。(機能 F2) 困り事を共有する：困っている人が自分の困り事をシステムに登録するとともに、支援する人がシステムに登録されている困り事を確認する。(機能 F3) 対処法を実践・評価する：困っている人が対処法を実践し、その効果を評価するこ

とで、対処法の有効性・信頼性をコミュニティで共有する。

【実証実験】

Compass4SL を試用していただき、評価・フィードバックをいただく実験を計画している。在宅介護における困り事・対処法を Web 上のコミュニティで共有することにご興味のある方は、専門家・非専門家に関わらず、ご連絡いただきたい。

【倫理的配慮】

本研究は神戸大学大学院システム情報学研究科の倫理委員会にて承認を得ている。

高齢期の社会的孤立と脳容積の関連：NEIGE Study

むらやまひろし

村山洋史¹⁾、飯塚あい¹⁾、町田征己²⁾、天笠志保²⁾、井上茂²⁾、藤原武男³⁾、菖蒲川由郷⁴⁾

1) 東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム、2) 東京医科大学、

3) 東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科、4) 新潟大学大学院 医歯学総合研究科

【目的】

社会的孤立が認知機能低下や認知症発症のリスク因子であることは多くの研究により支持されているが、その神経学的メカニズムは十分に解明されていない。本研究は、高齢期の社会的孤立と前頭前野、海馬、灰白質の容積との関連を検討した。

【方法】

新潟県十日町市で2017年に実施したコホート研究である NEIGE study のベースラインデータを使用した。参加者は65～84歳の地域在住高齢者527名であり、そのうち頭部MRI検査を受検した495名を本研究の対象とした(男性47.5%; 平均年齢73.3±5.5歳)。社会的孤立は、別居の家族や親戚、あるいは友人や近所の人と「会ったり、一緒に出かけたりすること」「電話、FAX、メールなどのやりとり」による接触頻度の合計が週1回未満の者と定義した(解析では、週1回未満/週2回未満/週3回未満/週3回以上の4群に分類)。前頭前野、海馬、灰白質の容積は、撮像した頭部MRI画像をFreeSurferにて解析し、算出した。共変量は、性別、年齢、婚姻状況、就労状況、教育歴、世帯収入、喫煙、身体活動量(3METs以上; 加速度計で測定)、高血圧、脂質異常症、心臓病、脳血管疾患、糖尿病、抑うつとした。

【結果】

共変量と推定頭蓋内容積を調整した重回帰分析の結果、接触頻度が週3回以上に比べ、週1回未満の社会的孤立者は前頭前野と灰白質容積が小さかった($b=-2751.4$; 95% 信頼区間=-4847.4～-655.4、および $b=-7987.4$; 95% 信頼区間=-15794.0～-180.8)。傾向性の検定では、接触頻度が低いほど前頭前野と灰白質容積が小さい傾向があった($p=0.050$ および 0.048)。一方、社会的孤立と海馬容積とは有意な関連が認められなかった。

【考察】

社会的孤立と認知機能低下、認知症発症との関連には、前頭前野と灰白質の萎縮が介在している可能性が示唆された。本知見は、認知機能低下、認知症発症の社会的メカニズムの解明への寄与が期待できる。

【倫理的配慮】

新潟大学倫理審査委員会の承認を得た。